

田辺史・伯孫は、飛鳥部郡の人である。一人娘を古市郡の書首・加竜に嫁がした伯孫は、石川、大和川を見下ろすこの北葛城の山麓に一人で暮らしている。

伯孫も加竜も、応神天皇の御世に百済から招来された「王仁氏」の末で、彼らの一族は文筆関係の官僚として、代々の大王家で重きを成した。

この日加竜の遣いが来て、伯孫の娘に子が産まれたことを告げた。

子は男子であった。加竜には女子がいたが、男子は初めての子である。

「赤子は、あの方の血を受けているはずに違いない……」

伯孫は、川向こうの古市の郡を眺めながら呟いた。ここからは加竜の館は見えないが、巨大な墳墓が並んで見える。ホムダワケ大王の陵と、皇后・仲津姫の陵（みささぎ）である。陵は伯孫が生まれたころには、既にあった。

この頃、ワカタケル大王の朝廷で編纂が進められている「帝紀」と呼ばれる大王の系譜には、次のように書かれていた。

「ホムダワケ大王はタラシナカツヒコ大王の第四子である。母を息長姫と申し上げた。ホムダワケ大王は、息長姫が新羅をお討ちになった年の冬12月に、筑紫の蚊田でお生まれになった。幼少より聡明で、御姿に恐れ多くも聖帝の兆しが有った。ホムダワケ大王2年の春3月に仲津姫を立てて皇后とされた。皇后はオオサザキ大王（仁徳天皇）の生母である……」

ホムダワケは、ヤマト王権の正当な後継者であると語っているのである。

しかし、伯孫が若い頃、一族の古老から聞いた話はこれとは違った。

ホムダワケは、彼ら一族をこの地へ導いた一人の武人だというのだ。そしてこの地で、ホムダワケは彼らの王となった。だから彼らは、祖霊の眠るこの陵を、彼らの神として代々守ってきたという。

伯孫は老いた。

「加竜には、そろそろこのことは伝えておかないと、それに……」

……それに、孫の顔も見に行かなくてはいけないしな、と伯孫は呟いた。

伯孫の時代から1世紀前、海の向こうに一人の英雄が現れ、朝鮮半島に動乱の嵐を巻き起こす。高句麗の広開土王である。高句麗は騎馬民族・扶余族が興こした国で、中国吉林省に残る広開土王碑文に、大王が新羅、百済を巡って倭人と交戦したことを伝えている。

「399年 多くの倭人が新羅に侵入し、王を倭の臣下にした。このため新羅は高句麗王の救援を願い出、大王は救援することにした」

「400年 5万の大軍を派遣して新羅を救援した。新羅王都に満ちていた倭軍が退却したので、これを追って、任那、加羅に迫った」

碑文は広開土王の軍勢が、朝鮮南部まで倭軍を退かせたと言っているのである。

加羅は朝鮮南部の小国の一つで、倭人が多く住んでいたらしい。この時、加羅国の国主の妹が、加羅国の民人と共に日本へ亡命したことが、日本書紀から伺える。国主の妹だから王女である。名を既殿至（キデンチ）といった。

「天皇、サチヒコを遣わして新羅を討たせたまふ。しかるに新羅の美女を納れて、捨てて討たず。反りて我が国を討つ。兄弟、人民、その為に彷徨える。憂へ思ふに忍びず、故に以て来り申す」

彼らは故郷を追われ、海を渡り、九州からヤマトを目指して流浪の旅を続けた。そして、半年の後、王女と彼女の民人達は、河内の国、羽曳野の丘にいた。王女は丘の中央に屹立し、四方を眺めている。

「あの川は？」と指差しながら、王女は横に立つ若者に聞いた。王女の傍らには赤子を抱いた侍女が蹲っている。赤子は加羅国の王族の衣に纏われていた。

「あの川はヤマトの国から流れている。名を大和川という」と、若者は答えた。

「ナクトン河のようじゃ」

王女は川の流れ行く西の方を見ながら、思い出すように云う。彼女の故郷、加羅の国都はナクトン河のほとりにあった。

「我はナクトン河の夕日を忘れぬ。ナクトン河に身を投じた母や兄王の無念を忘れぬ。ナクトン河に流された我ら一族の血を忘れぬ！。ここは良き地じゃ、加羅の国に似ている。我はここに新しき国を造ろうと思う」

王女は続けた。

「ホムダワケ、我を助けよ。我の民人たちを助けよ。汝は我と、我が民人をこの国に導いた。ホムダワケ、この赤子を助けよ」

ホムダワケと呼ばれた若者は、加羅国の滅亡の折、救援のために派遣されたヤマト朝廷軍の将軍だったのである。

「我はこれより仲津姫と名乗る。我の子はやがてこの国の大王となろう。ホムダワケ、汝はこの子の父親となれ。汝はこの国の大王になれ」

その時、丘の周りを埋める加羅国の民人たちから「ホムダワケ大王！」という声が嵐のように起こるのを、若者は不思議な気持ちで聞いていた。

我が大王になる……？、そんなことがあるのか……、しかし、今ヤマト王権の権威は地に落ち、誰が大王になってもおかしくない。それに加羅の民人は鉄を作り出す技術を持っている。新しい養蚕や農業の技術も持っている。そうだ、この民人の王となれば、この国の大王になることも夢ではない……と、ホムダワケは思っていた。

その日の夕刻、伯孫は娘夫婦の祝賀のために、古市郡へ出かけた。

石川を渡り、イチビコの丘の誉田陵のあたりまで来た時、赤馬に乗った人に出

会った。その馬はうねるように駆け、その様はまるで龍が跳ぶようである。伯孫はその馬を欲しいと思って、そばに寄り、轡を並べた。すると赤馬はたちまち抜き去り、菅田陵の方角に走り去った。驚いた伯孫が後を追うと、二重の濠を飛び越えたところで赤馬を下りた人がゆっくりと墳丘の上に上って行くのが見えた。墳丘の周りには、甲冑姿の武人たちが墳丘を守るように並んでいる。兵士の一人が「ホムダワケ大王！」と叫ぶと、他の兵士達も次々と「ホムダワケ大王！」と呼応し、雄叫びのように、夕照を映した墳丘に木霊していった

気が付くと、伯孫は自分の馬の上にあった。あたりはすっかり夕闇の中に沈んでいる。その時伯孫は前方に人影を見出した。人影は二人であった。一人は女人のようで、胸に赤子を抱いている。もう一人は男子で、女人と赤子を守るように佇立している。

「ホムダワケ大王！」

そう叫んで、伯孫は馬から下りて、道端に蹲拝した。すると女人が言った。

「お父さん、何してるのよ。あんまり遅いから、私達、迎えに来たんじゃないの」
それは、加龍の館の前だった。

(これは、ポポアの冊子と例会の話をもとにして作った話です)



5月9日 古市古墳群を歩く

ええ、今回は近いんです。僕はJRの大和路線ですから柏原の駅で近鉄の柏原線に乗り換えて、大和川対岸の道明寺まで行くんです。途中の駅は一つだけ、大和川の岸边にある南柏原駅。ここはちょうど石川が大和川に合流するところで、対岸の緑に覆われた大きな古墳は、冊子の地図で見ると一番手前の允恭天皇陵でしょう。そのむこうに、今日訪れる仲津山古墳や応神天皇陵があるはずです。

ここから電車はユラユラと大和川を渡ります。左の車窓に石川の河口が見えて、石川の対岸の小高い丘が玉手山、周辺の丘陵地帯に麻殖生さんの文章にあった玉手山古墳群があるはずです。

鉄橋を渡ると、もうそこに道明寺の駅がみえてくる。道明寺から集合駅の土師の里までは、南大阪線に乗り換えて一駅です。そうですね、家を出たのが9時前ですから、ここまで3 40分ほどの距離でしょうか。

でもここからが先が遠かった。そうです。この日のポコア・ポコの旅の目的地は、古墳時代と呼ばれる、遠い遠い時間の彼方、そう約千六百年もの過去への旅

じゃなかったでしょうか。

今回は、麻殖生さんの巻頭文に触発されて、僕も古代史の謎に挑戦してみました。といっても、応神内乱説とか、河内王朝とか、その時、その時で話を聞くとなるほどそうだよなあと思ってしまおうんですが、まあ、決定なところが分からないだけに面白い。今回、僕が注目したのは応神天皇の嫁さんの仲津姫です。応神天皇がヤマト王権とは別の王朝を打ち立てた革命児だとして、男が成功するためには「嫁」の存在は重要でしょう。器量がよいとか、料理がうまいとか、そんなことはどうでも……よくはないんですが、この場合、問題なのは、嫁の実家の実力です。で、この日、仲津姫陵と応神天皇陵が前後に見える所、古室山古墳でしたか、あそこの上で二つの古墳の高さを見比べてみたんです。

間違いない、**仲津姫のほうが高い**。やっぱりこれは嫁の実家の財力で彼は成功したに違いない。応神天皇には妃后が大勢いたんですが、仲津姫は次の天皇の仁徳天皇の生母です。で、この仲津姫のことを調べてみたんです。記紀にはただオオサザキを生んだとあるだけで、よくわからない。うーん、どうなのでしょう、これは仁徳天皇を、歴代の天皇の系譜に結びつけるために創作された女性なんですかね。仲津姫陵のほうが高いという問題の発想はよかったと思うんですが。

今年には応神天皇没後1700年の節目の重要な年で、ご命日の4月1日には宮内庁からも勅旨がこられて、厳かに式典が行われたそうです。平城遷都1300年のパロディかと思ったらそうではないんですね。誉田八幡宮の宮司さんが真面目な顔で言われてました。1700年前というと西暦310年。日本書紀に載っているそうです。ちなみに生年月日は201年1月5日。110歳だからずいぶん長生きされたんです。

道明寺天満宮で戴いた道明寺餅、緑が紫蘇餡、赤が柚子餡、緑のほうが美味しいと勧められたので、緑にしました。

おじいさんの木 第七号 おじいさんの木とは、地域で大切にされている大きな木、古い木、珍しい木、いわれや愛称のある木などで、所有者と地元住民ならびに NPO おおさか緑と樹木の診断協会とが協力して守っていくことができる木です。 NPO おおさか緑と樹木の診断協会

こんな風に書かれた立て札を道明寺天満宮で見ました。ここのおじいさんの木は「ムクロジ」という木です。そういえば、「もくげん樹」というお香の香りのするような名前の木も、道明寺にありました。それから「修羅」とか、木だけで作られた誉田八幡宮のだんじりとか、今回は木の話が豊富でした。一度、ポポアポコで、「木」をテーマにした旅というのはどうでしょう。